スプラトゥーン

～スタンドバイ ミラクルタコ～

●オープニング

谷に埋め込まれたスピーカーからは常に流行りの曲が流れているらしい。らしいというのは「あちら」の言語が2杯には解らないからだ。

「「だー！擦った！！レンタルなのに！！＜シオ＞！後ろどうだ！？」」

「……」

地盤が谷を造った。長い年月を掛けて。＜シオ＞は暇つぶしに眺める。割れて出てきた壁面には地層が見える。赤茶、白、黄土、黄色、赤茶、黒。綺麗に分かれているものかと思っていた。平らでない土の影や、大きさの違う小石、這う虫。意外と汚い。肌と同じだ。親指で唇を掻きながら思う。風がインクを冷やしている。尻が冷たい。地層は波のようにうねり過ぎ去っていく。「ニンゲン」とやらの化石を見つければ金になるかもしれない。もうタコが掘り尽くしているだろうが。できた穴にコードを通しスピーカーを設置している。よそ者へ警告のつもりだろうか？なんであれどうでもいい。

「「ぎゃぎゃぎゃ！まただ！！おっちゃんにボられる！！」」

飛行トラックが揺れる。トレーラーヘッドは荷台を抑えきれない。尻の下、座るコンテナが地層を削り反対へバウンドする。荷物は大丈夫だろうか？などと心配はしない。相方はそれどころではなさそうだ。
「「なぁおい！振り切ったか！？よな！？」」
「＜シュガー＞、そのまま」
反響し宗教曲じみてしまう流行歌なんて聞こえない。いつもの100均イヤホンからいつものシオカラ節。あとシュガーの弱音。声を作る余裕もなくなっているようだ。
谷に張り付くコオロギがハサミ虫に襲われている。すぐ通り過ぎてしまい結果が見えなかった。跳ねたら海へ真っ逆さま。どちらにしても死んだだろう。谷にロープが掛かっている。シュガーはスレスレでかわす。こちらはイカ形態でやり過ごす。ロープに洗濯もの。見たことないブランドだ。いや、ホッコリーだけは判る。
ヤキフグの影から小型飛行艇が現れた。上から来る。タコの黒いサングラスが赤く光って見下ろしてくる。
「「くっそ、死ぬぞ――！！」」
立ち上がっておく。インクと半同化させた足なら揺れも関係ない。上半身は揺すられる

がその程度でブレるエイムではない。
スプラシューター……と言っても実戦用だが……で待ち構える。手をインク化させブキをめり込ませる。タコの飛行艇が真上を取る。

頬に沿うよう伸ばした触腕がなびく。やはりこれは邪魔だ。

突然コンテナに何か生える。いや、突き刺さった。
「「何！？むっちゃ揺れた！！やっぱ死ぬ？シオ死んだ！？」」
コンテナの端と端で対峙する。
ジャンプビーコン。投擲できるとは聞いていない。
――ケヒャァア！――
タコ特有の発声とともに3匹が着地してくる。黒い肌に赤いインク。目は全て同じグラスに覆われている。口も一様に楽しげだ。シューター、ローラー、チャージャー、形状から判断するが正しいとは言い切れない。
――シシシ！――

ローラー状の奴が動き出す手前、先行する。
戦闘用ブーツから噴射されるインクに乗ってチャージャーの狙いをずらす。作られる赤いインクの床もこのブーツなら無視できる。振り下ろされたローラーを足で受け止め形態変化。ローラーに体を引きつけ、バネで飛び出す。ローラーの顔を踏みつけシューターの弾をこちらのインク弾で相殺、チャージャーの一撃をキューバンボムの曲面で逸らす。チャージャーは蹴りかかるこちらをシールドで弾いた。後ろにローラーとシューター、正面ではチャージャーがスコープを倒すと銃身も折り畳まれる。ほら、見た目では判断できない。
――フヒュア――
囲んだと思っているだろう。そちらこそ短絡的な判断はいけないな。
背中のインクタンクから2本の筒を引き抜く。インクから形成されるそれはそれぞれ不可逆式の爪がついており組み合わせることで1本の砲身になる。発射時の衝撃に耐えうる構造だが組み立てに失敗ができない。さらに実戦用は専用インクカートリッジを装着しなくてはならない。インクタンク、今度は下方、増設されたオプション取り出し口からガロン式カートリッジを取り出し発射口とは逆に、上下の間違いなく――ここだけはお間抜け

な気がしてならない――砲身ごと地面に叩きつけ半ば無理やりはめ込む。
ローラーが動き出したのはやっとそこから。敵の眼前で実践用「スーパーショット」の組み立てを終わらせられるのは自分ぐらいだ。

2杯に誤算があったとすれば谷の底、流れ込む海水スレスレを飛行したことである。直上を抑えられ仕方なかったのだが下からは攻めてこないとも踏んでいた。なんせイカもタコも泳げないのだから。
だから潜水艇が居たとも、そこから1匹のタコがトラック壁面に飛びついたとも、そいつがスパショで叩き落とされる仲間を見送りながら「モダン街」へ侵入したとも思いはしなかった。

●ハツバトル

「自殺の名所」

ただのスラングであり怖い意味も深い意味もありゃしない。

わからん初心者、焦った中級者、ミスった上級者がボッシュートされ続けるナイスなステージなだけだ。

堕ちた時の感覚たるや、まず視覚。ネット地図でお遊びに見るしかない屋根屋根が意外にカラフル。次いで開いた目が空気に包まれまぶたの奥が膨れる感触。ここでオススメなのは口を開けておくことだ。すると体の中に風が滑り込み夏は熱く、冬だってやっぱり熱い嘔吐感を催す。そんな嫌なものに「ああ、死ぬんだ」なんて思わされていると本当に体が溶け出す。指の先から、速いはずなのにゆっくり、時間の流れに沿ってゆっくりと。自分が水滴になっていく。水滴となった自分は表面積が拡大し体温を失い上へ残り霧となる。脳が溶けるか、心が溶けるか。どちらが先に逝こうとも自分の存在はもうインクの雨となっ

て大地に花を咲かす……といったところでリスポーン地点へ戻される。

（ジャスミンと度胸試し、アレも私の勝ちだったけど）

アイツがチビッてる様を妄想してしまう。頬を指で抑えイヤラシイ笑いを堪える。

それほどにリョウは暇している。

序盤で打ち抜きすぎて萎縮させてしまった。敵が高台踊り場から出てこない。味方も暇してる。コインで動く車の遊具で遊び始めた。屋台でクラゲがラーメンを啜っている。流石にナワバリバトルに混じるのはマズった。

「「きゃー！わー！何――！？」」

付き合いとはいえ。養殖にならんだけましか。

「オフロ。見て避けろ」

「「無理だってあんなの！絶対！」」

ヘッドバンド　ホワイト、わかばイカT、キャンバス　ホワイトにわかばシューター。

初心者御用達装備の幼馴染、アキをスコープで覗いてみる。

壁の手前、相手から見れば裏。内股体育座りでボブにした頭を抱えている。どちらかといえば丸顔で、目周りの隈取が薄く、固く瞑っている今ではほとんど見えない。いちいち青や紫のメイクで飾らなくていいのが羨ましい限り。体はイカにしては珍しく肉付きがいい。短パンスタイルなので運動してない太ももがよく見える。

「地味なパンツやめなって言ったじゃん」

「「へ！？わ！いいじゃん！！」」

耳装着型トランシーバーから、焦った返事が聞こえる。競技会、つまりバトロイカからの借り物だが意外といい。

”こもらず綺麗に！これであなた達のバトルも爽快清涼！”

ひねりも面白くもないＣＭだが嘘はついてないようだ。このバトルが上手くいけば買ってもいいかと思っていた。

（これっきりにしよう）

幼馴染が今になってバトルデビューすると言ってきたから連れてきたものの見込みはな

さそうだ。おおいに暇。無駄にビーコンを並べて遊ぶぐらい暇。ああ、これは失敗だった。ビーコンが拾う雑音に囲まれて過ごす午後のひとときが誕生してしまった。
相撲の実況ラジオだ。場を持たせるために「桃尻桃尻」連呼するあれだ。

無駄にジャンプして無駄にビーコンを潰し無駄に無駄な時間を浪費した頃、やっとカウント６０を切った。ヒーローショーで使うマイクが響く。
「「なになに、もーいやー！」」
「制限時間だよ。焦った奴が飛び出してくるよ」
予想通りマニューバーが坂を転がり落ちてくる。アキが背にする壁を這い上がるルートだろう。
「１杯くるから。置きボムでもして逃げな」
「「お、オキ？？？なに、もーやだー！」」
アキはまだ形態変化もできない頃「ばとるごっこ」を「ヤダ」と言ったときと変わらない。
（ムカつくな）

落下するマニューバーをわざと眼前で撃ち抜いてやる。
「ひー！！やだもー！やっぱやだー！！」

＊＊＊

バトル後は敵も味方もロビーに集まりおしゃべりする。リョウちゃんは早速敵チームの子とバイトに行くそうだ。「さっき打った（打たれた）仲」だという。ワタシはとてもリョウちゃんと以外は話せない。港の商店街へ向かう2杯の頭色はピンクと緑に光っている。ワタシのもピンクだ。けど、リョウちゃんほど綺麗じゃない。長い触腕をポニーテールに、前の触腕で顔を右半分隠してるのもかっこいい。

バトル後はしばらくインクの色が変わる。それが可愛くてやってみたくなった。リョウちゃんみたいになれるかと。けど、駄目だ。あんな目の回ることワタシにはできない。メイクもリョウちゃんを真似してやってみたら店長に大笑いされたっけ。この目、大っ嫌いだ。

海岸へ歩いていく。街はこの頃狭苦しい。外国からたくさん来てるのだという。看板には知らない言葉でメニューが追加され、片言の呼び込みに片言の注文。聞こえてないと思ってるのか大きな外国の笑い声。それにあっちはみんなスタイルがいい。新参者に追い抜かされた気分はこんなのだろうか？

海には誰も居ない。泳げないのだから来ても仕方ない。というか海水なんて浴びたら死にかねない。浸透圧どうこうと小学校で習った。ミサキ先生の体を張った実験は大成功だ。溶けた腕は当時見た児童向けホラー映画より怖かった。誰も海には近づかない。クラゲ達は居るがまだ寒い。

だから1杯になれる。ワタシのお気に入りは海岸の端、岩場を越えた向こうにある小さな入江。ワタシ以外誰も来たことがない。リョウちゃんを一回つれてきたっけ。遠くに流したブイを軽々撃ち抜いてたなぁ。

……リョウちゃん残念だったかな？バトルなんてしなきゃよかった。……わかばシューターだっけ。もういらないね。

砂浜に突き出る黒い岩に手をついて登る。岩に音が伝わるたびに表面に影が走る。イカ

より多くの足を持った生物が群れをなして逃げ惑うからだ。時折パニックになったのか手へ向かってくる。潰れろ、と払い飛ばす。裏返り体を丸めて触覚を痙攣させている。
岩の頂点までくる。ここからの海もそこそこいい。けど、岩の陰から見る、暗い先にある白波のほうが好きだ。早く見ようと降りる先へ目を移す。

（！？なに？）
そこにあるものがトレーラー、トレーラーヘッドであることが解らないわけではない。牽引免許だってある。理解を妨げるのは道などつながっていない、海と岩に囲まれた場所という点。もうひとつ。
目だ。気怠げに半分閉じられている。なのに大きく光っている目が捉えてくる。岩場の影から赤い瞳が、見ている。赤いのに黒く濁っているとも思える。
（……あ！えっと、わ！）
見なかったことにして帰る。が、運動不足。足を滑らせ入江へ転がってしまう。表面をスポンジ状に、穴の縁を鋭く刃物のように研がれた岩で皮膚が剥がれた気がする。
「っっ、」

地面から身を起こす。砂粒が羽織ったパーカーの袖を汚している。インクが滲む。
「いったー……」
刺激しないよう指先だけで砂を払う。体を影が覆い、細かい汚れが見えなくなる。
「……」
赤い目が見下ろしている。全裸の女を従えて。
黒い肌に張り出した胸。こちらとしては避けたい、外国の、タコとかいうのが全裸で近づいて来る。
「すみません！見てません！！ね！」
タコは直ぐ側でかがむ。胸の谷間がよく見える。黒い肌が日に光り、胸にはハイライトのような光沢が映る。眠たげな目の周りはおろか、顔に化粧はない。頭は今乾いたのかてんでボサボサ。赤と黒だけのそれだけの女。
タコ女は何事もなしに地面から服を拾い上げ、砂を払う。自分が残りの上に尻をついていることに気づく。
「ごめんなさい！」
女は聞きもせず黒いスパッツとTシャツを肌の上に直接着る。砂でジャリジャリしそう

だ。タコは岩の穴から黒いラバーのポーチを取り出す。シンプルな香水瓶を取り出すと、
「おぽわっぷ！」
こちらに振りかけてきた。つんと効く臭い。香りというより清涼剤。目に染みる。後ろで蠢く気配と共に首を釣り上げられる。
「べぃっ、ぐ、ちょっと！」
ショルダーバッグを盗られる。タコは中身を撒きながらトラックへ戻っていく。コンパクト、口紅、リップ、さっきまでしていたヘアバンド、カーラー。タコの足跡を追跡し、這いながら拾い集める。タコはわかばシューターを日にかざしている。透き通るプラスチックと影で更に濃くなる黒い手。突然わかばシューターをトラックに投げ入れると続いて財布も間髪入れず投げる。
「ぉひぃー！！」
あまりの横暴に口から変な音が出る。スマホを取り出しいじり始める。流石にパスは解らないようだ。
「ってダメダメ！！」
５回間違うと１２時間ロックが掛かる。酔っ払った時の思い出がフラッシュバックする。

5回目の入力で震える指。意に沿わない動き。結局リョウちゃんに半日一緒に居てもらった。あの迷惑そうな顔が忘れられない。

なんとか4回目で取り戻す。タコは音が判るぐらい鼻から空気を出すとトラックの影に戻っていく。

スマホにはバイト先の店長から入れられた翻訳アプリがある。幸い（？）まだ使ってなかったのだが、機会が来てしまったらしい。一番ポピュラーだという言語を選択する。

「さ、い、ふー、ふ、ふ、かー」

腕に痛み。一瞬走るだけでも頭に響く。おかげで考えが変わる。

「許可取らんでいい！！」

バッグを拾い上げるとトレーラーヘッドのドアノブへ手を掛ける。存外大きい。よじ登り体ごと引き倒す。

開かない。

「鍵！鍵は！？」

タコは前に回ってなにやら叩いたり蹴ったりしているようだ。振動がドアノブまで伝わってくる。そもそも扉が凹んでいる。ガラスは割れ、塗装が剥げるほどの擦り傷。バイト先

の車だけといえど真面目に安全運転している自分には信じられないものだ。
何かを締めたような音がし、タコがボンネットをよじ登ってくる。そのまま割れたフロントガラス越しに運転席へ。左ハンドル。ここにもグローバル化の波が。
「だから、そうじゃなくって！！」
財布が投げ入れられた窓からいつの間にやら重くなってしまっていた体を引き入れようとする。全財産を取り戻さなくては。その思いも虚しく腹まで来てダウンしてしまう。
「ちょっと、ひ、ひっぱって」
伸ばす手は取られることなく代わりにハンドル下で火花が散る。
（おー、アレだ。映画の）
低いエンジン音、計器が光り始める。軽自動車では見ないメーターばかりだ。ラジオは同じもののようで相撲中継が入る。
„あの桃尻が餅のようにー „
タコはレトロ風なホイールを意外にゆっくり回す。
„明日の天気は „
„今日の料理は „

”アナタの前世は ”
”リクエストは ”
”桃尻は ”
”マリアナ亭跡では ”
マリアナ亭跡、よくリョウちゃんが言っている。確かバイト先だ。タコが手を止めている。
（わかるの？）

”クマサン商会モダン支部の発表によりますと現在マリアナ亭跡にて原因不明の事故が起こっており周辺海域まで影響がある模様です。幸い現在はバイト時間外であり死傷者はいません。船をお持ちの方は近づかないように。写真、映像も駄目ですよ？ほんと、いいですね？ゆるしませんよ。――――まー、クマサンったらとっても親切♡みんなも気をつけてね♡では、「カガヤクンデス・マーチ」「Get The Shining Future!」二曲続けてどうぞ！ ”

（……リョウちゃん、バイトって言ってたけど……）

中止になったとかかな？
突然、地面が揺れた。タコがハンドルを動かしている。地面ではないようで安心
「できない！！ほんと引っ張って！！」
派手に車体が傾く。トレーラーが切り離され拍子だ。体がやっと滑り込みタコにヘッドスライディングする。タコは初めてこちらが居ることを意に介し、押しのける。そうしてる間にもトラックは反転し、海へ向いている。もうすぐ夕日だ。見ているだけなら美しことだろう。だいたい暇なバイト先や部屋のベランダから見ているだけだ。なにもせず見る夕日は美しい。
「おワッチ！！乱暴！！」
今日はそうはイカないらしい。
「ううん！？海だよ！？ねぇ！？」
明らかにトラックは海へ向かおうとしている。
ミサキ先生の腕に触らされた時、死というものを認識したのだと思う。
支えを失ったインクが指を伝ってくる感触。目を瞑った拍子に涙が溢れてしまった。
「やだ、やだやだやだ！！ちょっとぉ！！死にたくない！！」

突然のアクセルベタ踏み、シートベルトをしていなかった体が回転する。短い一生で最後に見るのが逆さになったタコとは思ってもみなかった。

リョウちゃん……。

「……？」

そろそろ海へ突撃して海水が侵入し、サスペンスものみたいな展開になってもいい頃だ。姿勢を起こし外を見る。

海だ。水平線に並ぶ岬や島、その向こうにはなんとかシティとかまたその向こうは外国かもしれない。波はひし形で整然と並び白い傷は風が起こすのか。沖のほうがより青いことを初めて知る。その上は空、水色だが水じゃない。少し赤み、オレンジ？黄色？が掛かっている。雲にも。寒い空気に打ち上げられた雲は高く、薄く、ちぎれちぎれだ。たまに大デンチナマズというのが飛んでるらしい。今日は居ないようだ。

「はー……」

窓枠に遮られて飛沫の先端だけが画面に入る。海の上を行っている。

（トラックって船だったんだ）

今はアホでもいい気がする。

「チョイト」
鼓膜に刺さる攻撃的な音に起こされる。左耳を疑い、顔を向けるとタコがラジオを掌で叩いている。
「ドコ？」
（喋った！）
いちいち不快感のある音だ。ボイスボックス――喉に当てるマイクみたいなやつという映画知識――はない。ボイスチェンジャーでもついてるのだろうか？覗き込んで見る。凹んだ喉元が揺れる。
「ドコダッテノ」
頭に重い衝撃。顔を戻すと小銭ばかりの財布が振り上げられている。
「返しっ」
肘でいなされシートへ転げる。
「スマホ、地図」
頭上で財布が揺らされる。首根っこは掴んだと？いや、それぐらい普通に頼めよ。これ、

従うべき？
「ケッ」
財布が海へ向かって投げ込まれる。
「はぁ――――！！！」
掠れた叫びは波の音より大きく響く。タコが手首を回すと財布が出現する。肩を上げ顔を後ろにそらし片目と口の半分だけで笑ってくる。
「はー……、はー……（マジで覚えてろよ）」
どうにか歯と腕の震えを堰き止める。それでも震える指でスマホをタップする。タコの行動から見て言いたいことを推測。冷静になれない頭で自信がないが画面を提示する。
＜マリアナ亭跡＞
「コッチカ」
急旋回するトラックから落ちるかと思う。ダッシュボードにしがみつき足を踏ん張る。足首に何か乗っかってくる。視界の回転が止まる。波の影が黒くなってきた海を、小さく緑がかった雲に向かって進んでいる。タコはハンドルから手を離し伸びている。
「……」

足が物を蹴る。欠伸をするタコから目を離さず手を伸ばす。
黒と赤の仰々しいシューター。ブキ――――競技スポーツとしてイカ達に大人気な「ナワバリバトル」で使われるインク発射装置。つまるところ水鉄砲、これで相手を打つことをバトルでは基礎としている――――には詳しくない。ただ、イメージとしてカラフルで丸っこいものだと思っている。手元にあるこれはそんなものには見えない。そういえばリョウちゃんが「ブランドコラボ」とやらがあると言っていた。アパレルメーカーが協賛するらしい。商魂たくましいものだ。バイト先にもこんな感じのカラーをした服が入っていたはず。タタキケンサキ？
いや、これで未だ返されない財布を取り戻せるかもしれない。撃てるかどうかはともかくそれだけなら。体をシートにだらけさせるタコを見やる。ブキを握りしめ呼吸を静かに腕を伸ばす。
「っい！」
怪我がまだ痛んだ。何度か形態変化してインクを傷口に補充したほうがいいかもしれない。と、顔に何か掛けられる。鼻につく刺す匂い。先程の香水だ。涙が出てくる。
「おい！ちょっともうコラ！」

「着イタ」

急に暗くなる。目の前にあるのはマリアナ亭跡なのだが、アキはもちろん知らない、知っていても気づけない様相だった。

＊＊＊

マリアナ亭跡は名前の通り豪邸跡だ。島1つを占拠している。シャケ達は石垣と同化する不揃いな階段を駆け抜け、3メートルはあろうかという玄関扉跡を通過、朽ちた高級家具を蹴飛ばし、そんなにいるのかと言いたい客間、値のいいマンションより広いトイレを素通りし、バルコニーから屋根へ登ってくる。そこで迎え撃つのが定石だ。

リョウはやはり暇していた。シャケの頭のない行動。こちらも馬鹿になりそうだ。.96ガロンの引き金を引く。まっすぐ飛ばないインク。それでも当たるシャケ達。他の3匹はもう遊びモード。自分も寝そべり、木製の屋根に長靴の踵をリズム良く打ち付ける。夕焼けが濃い。雲か鳥か、影が太陽を顔にしている。お天道様にも笑われている。船に戻る時間

だ。いい服が貰えればいいけど。ジャンプのサインはまだかと欠伸しつつクマサン商会の船に視線を向ける。

バクダンが船を押しつぶし、砕いている。

「！？！？」

石垣から伸びる堤防にタワー達がよじ登っている。1匹2匹ではない。沖からも顔を出す。水の上に立っているのかと思った。波に見えた足場は雑魚シャケ達が折り重なったものだった。バイト仲間が祝砲用に取っておいたプレッサーを開ける。吹き飛ばされる鍋。が、また組み上げられ復活する。タワーは石垣に突進。屋敷が揺らぐ。お互いの体を絡みつけながら壁を伝って登ってくる。下を覗き込んでいたバイト仲間がイカダッシュもせず走ってくる。どうやら前と左右は塞がれたらしい。後ろは空いている。しかし海に直行コース。浮き輪があれば死ぬことはない。クマサンの船がない今、シャケに食われる前に救助されるかの問題だ。タワー達が顔を出す。腹減ってそうだ。

登ってきたタワーは更に上へ伸びる。絡み合い空へ突き出る。絡むタワーは更に合流を繰り返す。鍋と鍋が擦れシンバルの大合唱。あまりの多さに音ではなく衝撃だ。屋敷の屋

根にヒビが入る。
「うひっ」
１杯がつまずきそのまま頭を抱えて動かなくなってしまう。残りは海を見やりうるさく飛ぶだ飛ばないだと言い合っている。ねじり絡まったタワーがこちらに垂れてくる。龍とでも言おうか。だとしたら顔、鼻っ面がこちらに向かって加速している。
「飛べっ！！」
他を構う暇はない。放置されてからは騒ぐ若いイカや走り回るサケ達にさらされながらも耐え抜いてきた屋根が龍に食われる。空中遊泳中に瓦礫に当たるとまずいと思ったがそれよりもマズい。龍が顔を突っ込んだであろう屋敷の窓枠が緑に発光している。
あの手のインク光は爆発する。

屋敷が炸裂する。
「っ！！！！」
ガロンの引き金を引き、飛んでくる、どこかの壁だったであろう部分につけたインク染みに形態変化して潜る。

海の上まで投げ出される。一度瓦礫から離れインクを打ち込み続ける。水しぶきを上げる木材にイカの手を沈め体を引き止める。なんとか海に落ちずに済んだ。こんなアクロバティックなことしたの何年ぶりだろうか。指の先までインクが回る。意味なくガロン振り回し＜ナイス＞する。２つの＜ヘルプ＞が帰ってきた。シャケに取り囲まれている。４杯で籠城は無理そうだ。

「へへっ」

まだ飛んでくる木くず、と言うには大きなものを避けつつ、シャケを伺う。オオモノはどこかへ向かって吠えている。街があるほうだが本心はどうだか。龍が屋敷だった場所から頭を引き抜いている。

「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあだーーー！！」

空から巨大な丸太が悲鳴をあげながら横の海へ突き刺さる。イカがギリギリしがみついている。生きてたか。

「いいもん持ってんじゃーん」

「ううん？」

スプラチャージャーを奪うと胸を海に浮く木片に付けできうる限り低い姿勢をとる。バ

トルでも滅多にしない狙撃姿勢。雑魚シャケは瓦礫で埋まった海を伝ってこちらへ向かってくる。イカしては帰さないらしい。

「パウチなし、援護なし」

何がなんだか解らない。波は穏やかなのに胸を付けた足場が揺れている。このリズムはジャスミンとの初対戦以来だ。合わせて歯を打ち鳴らす。エイムが狂いそうだ。最大効率で撃ち抜かなきゃならないのに。けど、止まらない。

＊＊＊

「シャケってあんななの！？」

アキは正に天を仰ぐ。「バイト」は危険と聞いていたがそれも納得だ。大きなものでイカの１０倍もはない程度。程度というには大きいんじゃないかと思えるのが聞いていたシャケの大きさだ。眼の前のこいつがシャケだとしたら桁を５つ、６つ間違えてる。巨大シャケは銀や銅の鱗を軋ませる。金属のこすれる嫌な音、どころではないあまりの量が大爆音を作り、海が波立ち、石垣が自らの意思で飛び退き、砕けるように見える。トラックの計

器が点滅する。
「大丈夫！？」
タコは意に介さず前進。シャケの影に近づいていく。
シャケが割れるかのような口を開く。鱗の隙間から噴出する緑はインクだろうか？海が揺れる。
（違う！流れてる！！）
シャケに吸われるかのごとく、根本に向かって波が逆行する。ささくれだった海の影が夕日のオレンジを打ち消し黒く染まる。
「キッ」
悪態なのかタコが舌打ちらしきものをする。数が多いペダルを踏みつけ、ハンドルをねじり、計器をやたら叩く。
「大丈夫じゃないでしょ！？」
「ウッセ！」
流れに逆らってない。水が扉に当てっているであろう低い音がする。
「うっだぁあぁあああーーーー！！！！」

叫び声もする。自分から出たのだろうか？叫びたいのも山々だが口どころかどこもかしこも動かない。したいけどできない。シートベルトを握りしめ足を胸まで引き込んだままインクがつってしまっている。タコは半目で海を睨みつけ口角を下に向けている。

トラックが揺れる。ベルトのロックが体を引き止めてくれる。縦に伸びていた影が見えなくなる代わりに水面が左に来る。

「ケッヒャア！！」

海水の飛沫が入り込んでくる。飛びつき、服に染み、顔に当たってくる。

「あちち！」

冷たいものが刺さってくるようなのに熱い。これぐらいなら大丈夫なはずだ。死なない。ふと思い出す。ここは海の上だ。トラックに乗ってるせいで忘れていた。しかも横倒しになってるっぽい。なんだかリョウちゃんに会いたい。

「ハッシャイ！」

海面が再び下になると共に尻がバウンドする。転覆は免れたようだ。赤い液体がダッシュボードに降りかかる。タコが海水で焼け赤いインクを流している。

「死なない！？」

「ケヒャヒャヒャヒャ！」
大口を開けて笑いかけてくる。死にはしないようだ。口に流れ込んだ赤いインクを笑いと共に飛び散らしている。
扉がぶっ叩かれる。窓枠の半分が黒か茶色に占拠されている。何かわからないがこいつがぶつかってきたようだ。
「は！？トラック！？」
上から声とともに顔が逆さに降ってくる。ダサい帽子だが紫のアイラインは見覚えがある。
「リョウちゃん！？」
「アキ！？そちらさん大丈夫？」
頭からインクを流すとんでもない形相のタコに苦笑いしている。
「くっぞくっぞ！！」
上から別の声が聞こえる。
「なんかあるなら撃ちまくれ！」
言い残すとリョウちゃんは消える。見えた海には跳ねる物体。群れて波から波へ飛び移

りこちらへ向かってくる。上からオレンジのインクが線となってそいつらを海へ叩き落とす。落としても落としても迫ってくる。
「撃テ、ドアホ！」
インクをこちらに吹きかけながらタコが罵倒してくる。合って1時間もないだろうにアホときている。
「なんなのよ！だいたいそっちが」
赤い裏拳が鼻を潰してくる。インクの匂い。体温の流れる感触。
「うえ……っぺぇ！」
＜鼻インク＞面にもう1発とんでくる。固い何かがさっきより深くえぐってくる。
「だんだよ！？」
タコが赤と黒のブキを押し付けてくる。波の音が一層大きくなる。
「来た～！！」
飛び跳ねていた何か、白い丸が2つ、顔と判るまでに近づいていた。
「ぅひぅ」
インクに塞がれた鼻と引きつった声帯で声がでない。とにかくブキをひったくると映画

知識的に考えてトリガーらしきところを両手のイカ指し指で押し込む。背中でインクが引っ張られる。ブキを使うと自動でインクタンクとやらがインクを固形化さして作られる。これは雑誌知識だ。

銃を揺らしてインクが飛ぶ。意外と当たるものだ。

「ぶつかっぞ―!!」

左から電車とレールがぶつかるような金切り音が大量に重なって鼓膜を破ろうとしてくる。赤いタコの向こう、残像しか見えないが金属であろうモノが擦れあい、海水を吸い込んでいる。

「ぐひぅ!」

「上ガレポンコツ!!」

タコがペダルを蹴っ飛ばす。チャルメラが聞こえた気がする。

「アッ、間違エテタ」

動く金属の壁に衝突する。轟音と共に運転席側の扉は剥がされ粉々になる。シュレッダーだ。タコはまた楽しそうに何か言ってきているようだ。舌を出してハンドルを優雅に回す。トラックのフレームもなくなる。上から何か落ちてくる。屋根も一緒に持っていかれてい

た。
「あの……」
今度こそ死ぬのかな？そう言ったと思った時金属のシュレッダーが離れていく。黒い時折光る部分のあった壁は赤や黄色に変わっていく、変わっては下へ、光が増しては下へ。やがて壁の終着が現れオレンジの原野が見える。海だ。夕日に染まった海。日が半分浸かり湯気をたてそうな海を見下ろしている。思わず立ち上がった。
「うはぁ……」
トラックは船でなく飛行機だった。そんなこともあるもんだ。
「アキー、鼻すごいぞ？」
緑のゴム手袋が鼻の下を擦ってくる。リョウちゃんが背もたれに腰掛けていた。
「うん、ほんと」
手を取ると自然と口から空気が抜け、眠たくなる。ゴムのツナギに顔を埋める。
「痛って〜〜」
座席と床の間から小さめのイカが器用に体をねじって顔を出す。
「ひゅー、やばかったー。なー、あれ何だよ？」

指さすところ。正面に居る。鱗を夕日で煌めかせ、こちらを見ている。見ているのは目。無数の目。光る中でも判る白い濁った目がこちらを見ている。緑のインクが滲み、滝になって落ちている。

巨大なシャケが鼻でトラックを嗅いでいる。

「……クケッ」

シャケの先端が割れる。引き剥がされ、歪む金属の音がシャケの口の中で反響してから飛んでくる。トラックの計器が鳴り響く。

「マイッタネドーモ」

タコがトラックを旋回させる。そうだ、飛行機だと言うなら逃げ切れる。

反転した前には空飛ぶゴミバケツ軍が待ち構えていた。戦艦までいる。

「ハイプレ使っちまった！！」

「アキ！スペシャル溜まってる！！」

すぺ？なんだって？

「タコの方！何！？」

「ジェッパ！！」

解らない会話が周りで飛び交う。トラックがスピードを上げている。戦艦にタックルしそうだ。
「そっちも抑えて！！いけアキ！！」
リョウちゃんともう1杯にガッチリ抱きつかれる。暗くなった。空に緑の光が幾筋も見える。戦艦達が光に染まる。トラックの影絵が見える。
「フヒャハッ！」
タコがブキを外に向け撃ち始める。世界が緑に染まっていく。
「まだるっこしい！！」
首筋あたりに鈍痛。同時に手にあったブキがインクを噴出。パーツの隙間から出たインクがすぐさま引き戻されブキを包み込み別の形を作る。足元にすごい勢いで液体が溜まっている気がする。
リョウちゃんの指が手に掛けられる。
同時にブキからインクの塊が飛ぶ。反動で腕が上に飛ぶ。
「うっはぁ！なんだこれ！？」
「イカすじゃん！！」

次々にインクを飛ばしていく。リョウちゃんの手の向くままに振り回される。先々ではゴミ箱やプロペラが四散する。巨大戦艦も砲撃を受け仰け反る。雷が鳴っている。緑の光も電撃の蛇行を形作っている。

「いけぇい！！」

小さいイカの叫びと同時に戦艦は撃ち落とされトラックは群れを抜け出る。

夕日は早い。もう暗く、静かな夜だ。

音がない静かな夜。

「え？あれ？」

「掴マッテロ」

赤い霧が夜を隠す。それを乗り越えて緑、そして白の光が疾走った。

白に包まれたところで、途切れる。

☆☆☆　エピソードチココ　☆☆☆

「ったっだいまー〜」

マンションのロックを外すのもうっとおしい。なんせ3回もやらなくちゃならない。むちゃくちゃ疲れてても変わらない。

やっと入れた部屋で2匹が迎えてくれる。

「エミー、ルーミー」

ポスターの女の子はこんな日でもアタイを癒やしてくれる。

けど、お話は後。今はベッドへダーイブ。

ベッドはRX九とガザマキに使われていた。そうだった。ビッゴーも組まなきゃいけない。まいった。もういっか、オリジナルなら10万はいけるし。

……腹減った。今日は落ち着いてハイボールな気分だ。冷蔵庫を探る。有り合わせも切らしている。また注文しなくちゃいけない。ラップに包まれた何かがある。なんだこれ？いいや、チンすりゃ何でも食える。

今日はイスで寝よう。ハイボールにレモンが欲しい。けどもう立てない。
メールが来ている。なんだって今日送ってくるんだか。
……デコレーションブキ作成依頼……完璧に忘れてた。もう適当にやっちゃおうか。だいたいみんな自分で作らなすぎる。組み立てモデルのほうが安いのに。
エミー、ルーミー、アタイを癒やしておくれ。こんな時は静かに「フェイゲへの花」をヘビーローテーションだ。
……ねー、エミー、ルーミー、歌ってる最中ごめんね。今日はもうほんと大変だったんだ。なんかバイトでさ、シャケが大暴れで、トラック乗って逃げてきたんだー。ほんとスゲかったんだ。慰めてくれる？
リョウンは寝ただろうか？なんだかムズムズくる。誰かと話したい。
電話しよ。
「……もっしー、リョウン？あー、こっちももーねむーい。まじでもー。明日どうすんのー？あき？あー、へー。じゃ、アタイも行く―。伝説の樹になー、うーっす。おやすみー」
レンジできたっぽい。でもいいや。明日食おう。
エミー、ルーミー、おやすみ～。